

“ These People Are Not Your People ” : 『サンクチュアリ』における人種問題と階級問題

著者	島貫 香代子
雑誌名	商学論究
巻	70
号	4
ページ	115-132
発行年	2023-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030657

“These People Are Not Your People”

—『サンクチュアリ』における人種問題と階級問題—

島 貫 香 代 子

要 旨

本稿ではウィリアム・フォークナーの『サンクチュアリ』を取り上げ、禁酒法時代の酒類密造・密輸や売春組織にかかわりながら南部社会の底辺で生きる白人貧困層（ブア・ホワイト）の人種・階級問題について考察する。最終的に、逸脱した社会的地位のある人々は元の場所に戻り、無法者は処刑・追放され、ジム・クロウにもとづく階級社会はより強固なものとなる。本稿では特に、トミー殺しの嫌疑をかけられた白人のリー・グッドウィンが、テンプル・ドレイクを強姦・誘拐した罪も負い（両方とも冤罪）、多くの場合は黒人が対象となるリンチを受ける結末に注目し、これを南部の支配層が形成した人種・階級イデオロギーに翻弄される無法者のブア・ホワイトの悲劇として検証する。

キーワード：ウィリアム・フォークナー (William Faulkner)、『サンクチュアリ』 (*Sanctuary*)、ジム・クロウ (Jim Crow)、人種 (Race)、階級 (Class)

I はじめに

ウィリアム・フォークナーは、6作目の長編小説『サンクチュアリ』(1931)の執筆動機について、モダン・ライブラリー版(1932)の序文で次のように語っている。“To me it is a cheap idea, because it was deliberately conceived to make money.” (Polk 321-22) この序文は必ずしも作家の本音や当時の事実に沿っているとは限らず、従来の研究では“red herring” (qtd. in Guttman 16) と見なされることも多い。しかし、1929年に幼馴染のエステ

ル・オールダムと結婚し、1930年にギリシャ復興様式の古い邸宅「ローワン・オーク」を購入したフォークナーにとって、経済的事情から売れる作品を書く必要に迫られていたのはたしかである。本の話題性と売れ筋に配慮したと作家は語るが、出版社のハリソン・スミスは過激な内容に難色を示す。

“I took a little time out, and speculated what a person in Mississippi would believe to be current trends, chose what I thought was the right answer and invented the most horrific tale I could imagine and wrote it in about three weeks and sent it Smith, who had done *The Sound and the Fury* and who wrote me immediately, ‘Good God, I can’t publish this. We’d both be in jail.’” (Polk 323)

性的不能者が17歳の女子大生をトウモロコシの穂軸で強姦するという衝撃的な内容は、スミスの懸念に反して多くの読者の興味を引き、『サンクチュアリ』は作家の望み通り最初のベストセラー小説となった。

『サンクチュアリ』を金稼ぎの道具のように説明するフォークナーだが、前述の序文では本作品の文学的意義についても強調している。骨の折れる数々の推敲は直前に書き上げた『響きと怒り』（1929）と『死の床に横たわりて』（1930）の出来栄えに恥じない内容に本作品を仕上げようとした作家の苦闘を物語るし、現在のフォークナー研究においても、多くの代表作が生まれた時期に執筆された本作品は問題作ながらも高い評価を得ている。創作活動におけるお金と芸術の問題に直面しつつも、本作品の大幅な書き直しを通して、フォークナーは両者のバランスを取ろうとし、小説家としての自覚と自信を深めたと言える。

本作品の大幅な書き直しで強調されることになったのが、禁酒法時代の酒類密造・密輸や売春組織にかかわりながら社会の底辺で生きる白人の無法者である¹⁾。密造酒グループの首領のポパイ、ポパイの仲間のトミーとリー・グッドウィン、リーの内縁の妻のルービー・ラマーといったアウトローな生

きざまが、弁護士のホレス・ベンボウ、ホレスの妹のナーシサ・サートリス、名門判事を父に持つテンブル・ドレイク、テンブルのボーイフレンドのガワン・スティーヴンズといった上流意識を持った人たちの安定した暮らしに対比され、ミシシッピ州ヨクナパトーファ郡の格差社会を裏付ける。さらに本作品には貧しい家系から上院議員にまで成り上がったクラレンス・スノーブスも登場し、アメリカ南部の白人の立ち位置が一枚岩ではないことを物語る。それまでのフォークナー作品で取り上げられてきたプランテーション時代にさかのぼる精神貴族や労働者階級の白人貧困層（ブア・ホワイト）に加えて、社会の既存の枠組みから外れた無法者のブア・ホワイトが描かれているのが本作品の特徴である²⁾。

フォークナーがこうした多様な白人の姿を描いた背景には、南北戦争後のアメリカ南部における産業・職業構造の変化——分益小作制と工業化に伴う労働市場の構造変化——がある。1929年にアメリカで始まった深刻な世界大恐慌も重なり、本作品が出版された頃の南部ではブア・ホワイトが大きな存在感を示すようになっていた。16世紀頃にはすでに“waste people”と呼ばれ、その後“white trash”とも呼ばれるようになったブア・ホワイトは、生産性がなく、財産を持たず、健康で将来有望な強い子供を産めないという汚名を着せられてきた（Isenberg xiv-xv）。彼らの貧困と社会的後進性に対する社会の嘲りは“lubbers,” “rubbish,” “clay-eaters,” “crackers,” “trailer trash,” “rednecks”（Isenberg 2）といった蔑称にもあらわれているが、このように

- 1) フォークナーの書き直しの過程については Polk 319-20 を参照のこと。白人の無法者により焦点を当てた刊行本に対し、1929年1月から5月にかけて執筆された「オリジナル版」には『土にまみれた旗』（1973年に死後出版）を『サートリス』（1929）として出版する際に削除したホレス・ベンボウの心情描写が多く含まれている。なお、本稿において、頁数のみの引用は『サンクチュアリ』からのものである。
- 2) クリアンス・ブルックスによると、酒類密造・密輸を生業とするリーとかつて売春婦だったルービーはブア・ホワイトの典型ではない。彼らは貧しいだけでなく無法者であり、社会とのつながりを断ち切られているからだ。こうしたブア・ホワイトが南部の田舎の裏社会に一定数いることはたしかだが、フォークナーの描くブア・ホワイトの大多数は共同体の一員であり、社会の法制度に縛られた存在だとブルックスは主張する（Brooks 23）。本稿でも、リーやルービーのような無法者のブア・ホワイトとスノーブス一族のようなブア・ホワイトを区別している。

差別の対象であったブア・ホワイトの労働力が南北戦争後に注目されるようになったのである。

ブア・ホワイトの台頭には、南部が次第にジム・クロウ社会となっていくことも影響している。白人社会の分断を避け、下層階級の白人の不満や憤慨を和らげるために、主に黒人を対象としたジム・クロウという人種差別・隔離政策が利用されたのである。ソンドラ・ガットマンは、工業化を体現する人工的な存在としてポパイを見なし、工業化と大衆化に対する懸念が人種的パラダイムを通じて本作品で表現されていると論じるが (Guttman 26)、本作品における工業化の描写は限定的である。ただし、工業化にともなうブア・ホワイトの人種意識の変化が、無法者であるポパイたち密造酒一味のふるまいにも影響を及ぼしているという点で、工業化による社会構造の変化は本作品において重要な意味を持つ。南北戦争後に顕著となった南部白人の階級問題を人種問題に引き付けて描いたことが、本作品の解釈を複雑なものにしていることはたしかであろう。

本作品で中心となる酒類密造・密輸と売春組織は必ずしも工業化に連動しているわけではないが、工業化を中心とする南北戦争後の南部の経済構造の変化はブア・ホワイト全体（無法者と労働者階級の両方を含む）の人種意識に変化をもたらした。また20世紀前半の移民制限と黒人大移動は白人と黒人の二元論的な人種構成の再編を促したが、様々な背景を持ったホワイト・エスニックの白人化 (becoming Caucasians) は、人種が中立的で生物学的に決定された自然の要素ではなく、イデオロギー的・政治的な決定の産物であることを物語る (Jacobson 14)。本稿では、トミー殺しの嫌疑をかけられたリーが、テンプルを強姦・誘拐した罪も負い（両方ともポパイの仕業なので冤罪）、多くの場合は黒人が対象となるリンチを受ける結末に注目し、これを南部の支配層が形成した人種・階級イデオロギーに翻弄される無法者のブア・ホワイトの悲劇として検証する。

II 無法者のプア・ホワイトと黒人の類似性——階級の視点から

『サンクチュアリ』は、多くのフォークナー作品の舞台となるミシシッピ州ヨクナパトーフア郡ジェファソンではなく、この町の南東に位置するフレンチマンズ・ベンドと呼ばれる村の外れにあるオールド・フレンチマン屋敷から始まる。ポパイたち密造酒の一味はこの人里離れたプランテーションの廃墟で酒類を密造し、ジェファソンやテネシー州メンフィスに密輸している。現在住むキンストンから故郷ジェファソンに向かう途中の泉でポパイと出会ったホレスは、ポパイに密造酒の取締官と勘違いされてオールド・フレンチマン屋敷に連行されてしまう。ホレスは後に解放されるが、大学生のテンブルとガワンがこの屋敷に立ち寄り、テンブルの強姦と誘拐という残酷な事件へと発展する。本作品でとりわけ興味深いのは、密造酒一味の描写に人種的要素が含まれていることだ。本章では、本作品で無法者のプア・ホワイトの黒さが強調され、あたかも彼らが黒人であるかのように描かれていることについて考察する。

本作品の語り手は、ポパイ、リー、ルービーといった密造酒グループのプア・ホワイトを彼らの黒さで表現している。特に語り手が多く言及するのはポパイの黒さである。彼の黒いスーツと靴だけでなく、黒い匂いや黒い目つきといった彼の醸し出す雰囲気についても、語り手は物語の端々で強調する(4, 7, 38, 97, 225, 309, 310, 312, 313)。テンブルやホレスはポパイをしばしば“that black man”や“a little black thing like a nigger boy”と呼び、彼の“black presence”と“black and nameless threat”を感じ取っている(42, 49, 109, 121, 219)。ポパイの血の気のない青白い肌とほっそりした体形に反して、ガワンとホレスは虚弱な彼を“that ape”と“that gorilla”(49, 128)にたとえる。これは彼の威嚇的でやくざな側面を強調する一方で、語り手とヴァージル・スノープスが黒人を“gorilla-like”(135)、“monkey niggers”(190)と呼ぶことからわかる通り、ポパイを黒人と見なすような発言とも受け取れる。

白人であるポパイのこうした黒さと凶暴性については多くの研究者が考察してきた。レスリー・フィードラーは “[t]he black man” が “a traditional American name for the Devil” を意味することを指摘したうえで、ポパイを “more monster than human, more shadow than substance” と述べる (Fiedler 90)。ジョン・N・デュヴァルはポパイを本作品の “figurative blackness” の中心に据え、“although Caucasian, [he] activates a southern hysteria over black male criminality and sexuality” (Duvall 38) と論じる。ポパイが “an artificial Negro” (Duvall 39) であるというデュヴァルの指摘は、ポパイが “raced black” で “an artificial man” (Guttman 25) であり、“more nonwhite than white” (Barker 157) であると主張する他の批評家の考察にも通じる。農村の下層階級であるヒルビリー (プア・ホワイトのこと) と黒人の関連性は目新しい話ではないと述べたうえで、デボラ・バーカーは “[b]ecause ‘race’ is also signified by speech, dress, behaviors, etc., a character can be coded as one race while visually signifying another” (Barker 156) と主張する。ポパイの “invisible blackness” (qtd. in Guttman 25) はまさにこれに該当し、人種カテゴリーが恣意的であることを示している。

ポパイと同じくアウトローな人生を送るリーの描写もしばしば黒さを伴う。語り手はリーが黒い髪と黒い無精ひげをもち、浅黒い顔をしていると説明し、彼の身体的な黒さを強調する (12, 115, 269, 281)。彼の人生も波乱万丈だ。ルービーとホレスの話にもとづき、リーの過去の物語をまとめると以下のようなになる (59, 109, 276-78)。1899年から1902年にかけて行われたフィリピン・アメリカ戦争に出征したときに他の兵士と女性をめぐる諍いになり、その兵士を殺した罪で、カンザス州北東部にあるレヴェンワース刑務所に投獄される。収監されていたあいだ、1916年から1917年にかけてアメリカとメキシコの間で生じた国境紛争や1917年にアメリカが参戦した第一次世界大戦の戦場へ駆り出された。フィリピン・アメリカ戦争とメキシコ国境紛争では騎兵隊の軍曹を務め、第一次世界大戦ではフランスに派遣されて2つの勲章をもらうほどの大きな功績を残したにもかかわらず、フランスでは歩兵連隊に転

属して階級を下げられている。転属と降格の理由は不明だが、女性をめぐる誰かを殺したか、軍隊を脱走したことが原因のようだ。刑期が残っていたため、戦後、再びレヴェンワース刑務所に収監され、弁護士が議員を動かして彼を出獄するまでそこにいた。それから密造酒に携わることになるが、今度はトミーを銃殺した罪でジェファソンの刑務所に入れられてしまう。そこには妻の咽喉を剃刀で掻き切って殺した黒人の囚人がいた。リーと黒人殺人犯が同じ刑務所に投獄されている様子は、身体的だけでなく、社会的にも、リーが黒人と同様の境遇に置かれていることを示している。

本作品ではリーの内縁の妻であるルービーの黒さについても言及されている。ホレスはナーシサと彼女の義理の大叔母であるミス・ジェニーに、ルービーが“doing a nigger’s work, that’s owned diamonds and automobiles too in her day” (109) と語り、メンフィスで売春婦として華やかな生活を送っていたと思われるルービーが、今やリーの内縁の妻として黒人がするような家事に従事していると説明する。彼女の衣類も黒人女中が身につけるもの、もしくはそれ以下のレベルであることを彼女自身が自覚している (75)。ルービーがかつて売春婦だったこと、リーと正式に結婚せずに赤ん坊を産んだこと、そして現在は密造酒グループのメンバーの一人として社会の底辺で生きていることは、白人でありながらも彼女がジェファソンの保守的な白人コミュニティに加わるができないことを物語る。実際、ナーシサやジェファソンのバプティスト教会の婦人連は彼女がベンボウ家の屋敷や町のホテルに泊まることに断固として反対し、自分たちのコミュニティから彼女を排斥しようとする。ホテルを追い出されたルービーと赤ん坊はいったんリーのいる刑務所で過ごした後、ホレスの尽力で、黒人のために呪い薬をつくっていると噂される半狂乱の白人老婆が住むこわれかけたぼろ家に身を寄せる。黒人がひっきりなしに裏口から出入りするこの家は町はずれにあり、警官たちが一度密造ウィスキーを捜したこともある、オールド・フレンチマン屋敷を思わせる場所で、皮肉にもルービーが住むのに適したところである。このぼろ家も、ルービーや白人老婆といった無法者のプア・ホワイトと黒人の社会的位

置づけの類似性を物語る。

もちろんポパイ、リー、ルービーは人種的には白人だが、ドリーン・フェウラーが“the bootleggers and prostitutes in *Sanctuary* function as substitutes for a nearly invisible black community” (Fowler 422) と指摘するのも頷ける。黒人と一緒に投獄されたポパイとリーや黒人が出入りする家に滞在するルービーの境遇は、ジム・クロウの人種隔離とは異なる白人同士の隔離が行われていることを示しているのだ。無法者のプア・ホワイトの低い社会的地位は人種イデオロギーによって強化される (Palmer 129)。バプティスト派の牧師はリーを “[n]ot only as a murderer, but as an adulterer; a polluter of the free Democratic-Protestant atmosphere of Yoknapatawpha county” (128) と非難し、リーとルービーを焚刑にすべきだとまで言うが (実際にリーは暴徒によって焚刑に処せられる)、当時、焚刑は黒人に対して頻繁に行われていた。社会の罪を取り締まる警官や社会規範を強調する町の女性たちは、黒人をジム・クロウの論理で締め出すように、無法者のプア・ホワイトを彼らのコミュニティから排斥する。リーとルービーの不遇を聞いた後でも “These people are not your people” (119) とホレスに語り、“Maybe they’ll wait and hang them [the negro murderer and Lee] both together,” “They do that sometimes, dont they?” (134) とホレスに尋ねるナーシサの心ない言葉は、それを端的に物語る。

Ⅲ 無法者のプア・ホワイトと黒人の相違性——人種の視点から

前章では、語り手や他の登場人物が、人種的には白人に属するポパイ、リー、ルービーの見た目やふるまいを彼らの黒さに基づいて判断し、彼らを自分たちの白人コミュニティから排除していることを考察した。こうした黒さは無法者のプア・ホワイトと黒人の社会的位置づけの類似性を示しているが、だからと言って、ポパイ、リー、ルービーが黒人に対して同類意識を持っているかということ、必ずしもそういうわけではない。語り手やジェファソンの人々の見方に反し、彼らのふるまいはむしろ、黒人とは一線を画そうとす

るような人種的配慮に欠けたものなのだ。そこで本章では、これら三者の白人としてのふるまいに焦点を当て、語り手と他の登場人物との意識の違いについて考察する。

ルービーによるリーの過去の物語で興味深いのは、彼が最初に投獄されるきっかけとなった女性の存在である。これはフィリピン・アメリカ戦争時の出来事であることから、この女性は現地の有色人種（アジア系）の女性だと思われるが、ルービーはこの女性を“one of those nigger women,” “that nigger woman” (59, 276)と呼んで話を進める。彼女が白人と黒人の二項対立的な人種観を持ち、多様な人種的背景に無頓着な様子は、ホレスが件の女性を“Manila and Mexican girls” (109)と表現しているのとは対照的である。戦争に駆り出されたりーを待つあいだ、サンフランシスコやニューヨークといった西部や北部の大都会で堅気の仕事を見つけ、堅実に暮らしていたことに鑑みると、ルービーは白人と黒人が大半を占める南部とは異なる多文化社会も知っていたはずだ。しかし、有色人種全般を黒人のカテゴリーにまとめて自身と差別化する様子からは、彼女が人種に関しては南部で浸透していたジム・クロー的な考え方を内面化していることがうかがえる³⁾。

ポパイとリーも黒人と自分たちを同一視する様子はない。特に顕著なのは、ポパイとリーが黒人殺人犯の歌声を刑務所で耳にする場面である。本稿では、黒人死刑囚の黒人霊歌を聴いたときのリーの反応を例に考えてみたい。

After supper a few negros gathered along the fence below—natty, shoddy

- 3) プア・ホワイトの人種観で興味深いその他の例は、プア・ホワイトから成り上がったクラレンス・スノープスの言動である。彼は黒人の売春宿に躊躇なく入り、お金はどこで使おうとも“color-blind” (199)であると述べる。また、自らを礼儀正しいバプティスト派のアメリカ人と定義する彼は、“the lowest, cheapest thing on this earth aint a nigger: it’s a jew. We need laws against them. Drastic laws” (265-66)と語って黒人よりもユダヤ人を下に見る。さらにクラレンスは、ジム・クロー法のように黒人（ひいては有色人種）を隔離・差別する法律をユダヤ人にも作るべきだと力説する。こうしたジム・クロー時代におけるユダヤ系アメリカ人に対する差別については、1915年に起こったユダヤ系のレオ・フランクのリンチ殺害事件をもとにユダヤ人排斥主義を考察した Jacobson 62-68 を参照のこと。

suits and sweat-stained overalls shoulder to shoulder—and in chorus with the murderer, they sang spirituals while white people slowed and stopped in the leafed darkness that was almost summer, to listen to those who were sure to die and him who was already dead singing about heaven and being tired; or perhaps in the interval between songs a rich, sourceless voice coming out of the high darkness where the ragged shadow of the heaven-tree which snooded the street lamp at the corner fretted and mourned: “Fo days mo! Den dey ghy stroy de bes ba’ytone singer in nawth Mississippi!” (114-15)

黒人殺人犯は自らの死が間近に迫っていることを意識し、人生の悲哀と諦念を歌に込める。死刑執行まであと1日というときにも黒人は“One day mo! Den Ise a gawn po sonnen bitch. Say, Aint no place fer you in heavem! Say, Aint no place fer you in hell! Say, Aint no place fer you in jail!”と歌い上げるが、その歌声を聴いたリーは“Damn that fellow”とつぶやいた後、“I aint in any position to wish any man that sort of luck, but I’ll be damned.”と語って、黒人と同じ立場にいなながらも、彼の歌声を耳障りなものとして一蹴する(115)。本作品の他の場面でも哀愁を帯びた黒人の歌声が登場するが、ポパイとリーに限らず、白人はその歌声を聞き流すだけにとどまり、他の黒人のように歌に加わることはない。白人は黒人全体の宿命(“those who were sure to die”)と黒人殺人犯の現状(“him who was already dead”)に思いをはせるが、彼らが来世の“heaven”と現世の“being tired”について切々と歌うのを聴いても感情を揺さぶられる様子はない。こうした白人と黒人の反応の違いは、南北戦争後も変わらない黒人の苦境と白人の優位性のあらわれであると同時に、白人至上主義の価値観が無法者のプア・ホワイトにも浸透していることを示している。

興味深いことに、刊行本で第16章の冒頭に位置するこの場面は、「オリジナル版」では第1章の冒頭に置かれている。黒人の歌詞とリーの言葉に変更

はないため、刑務所に響き渡る黒人霊歌とリーの反応は、フォークナーが当初から人種の境界線を重視していたことを物語る。ただしノエル・ポークが述べるように、「オリジナル版」の刑務所と黒人殺人犯は、家庭の悩みを抱えて鬱屈としたホレスにとって大きな意味を持つ存在として描かれており (Polk 21)、リーと黒人の類似性と相違性に力点が置かれているわけではない。また、刊行本では銃に象徴される無法者のポパイと本に象徴される弁護士ホレスが対峙する場面から始まるため、フォークナーは本作品で白人の社会的地位の多様性を描こうとしたのであろう。これらのことから、作家が本作品を書き直す際にホレスの個人的な物語を後退させ、より広い視野で南部のジム・クロウ社会における人種・階級のテーマを前景化したことがわかる。

エーリヒ・ナンも指摘する通り、ポパイとリーは、黒人の歌声をペースの表現あるいは不正に対する明確なメッセージとして受け止めたり、黒人殺人犯に対する共感や情緒的反応を示したりする様子を見せない。こうした彼らの冷やかな態度は、同じ囚人という立場にありながら、彼らが人種の境界線を越えた一体感よりもジム・クロウにもとづく人種差別や敵対心をあらわにしていると言える (Nunn 88-89)。当然ながら、実際に殺人を犯した黒人と、無実の罪で投獄されて死刑になるポパイとリーのあいだで心情に違いが生じるのはもっともなことだ。ただし、自分たちの逮捕を理不尽だと感じ、弁護士をつけてもらい、いずれ釈放されるかもしれないとかすかな希望を抱けるのは白人のみである。実際にリーは兵士を殺して投獄されたときに弁護士の協力で釈放された経験があり、保守的な南部社会での出来事とはいえ、今回も大丈夫という思いはあったかもしれない。白人の自分は助かる見込みがあると考えれば考えるほど、死刑になるのを疑わない黒人殺人犯に同調できないのは無理もないことである。

その一方、ジム・クロウ社会において、逮捕された黒人が釈放される可能性が皆無なことは、リーと一緒に刑務所に入っていた黒人殺人犯が本作品で語られることなくひっそりと (“without pomp, ... without circumstance”

[131]) 処刑されたことからわかる。処刑前日、黒人死刑囚は天国、地獄、白人の刑務所のどこにも居場所のない絶望感を次のように歌う。“One day mo! Aint no place fer you in heavum! Aint no place fer you in hell! Aint no place fer you in whitefolks’ jail! Nigger, whar you gwine to? Whar you gwine to, nigger?” (127) この悲痛な問いかけに対する答えはなく、行き場を失った黒人の悲哀が強調されるばかりである。黒人のように来世に思いをはせることもなく、現世の不当な逮捕と黒人の歌声に反発するポパイとリーの様子は、彼らが社会的立場の類似性よりも人種的差異を重視していることを物語る。

IV 上流階級の白人の支配——人種と階級の視点から

これまでポパイ、リー、ルービーといったブア・ホワイトの中でも無法者の黒さについて考察してきたが、『サンクチュアリ』の語り手は、こうした無法者以外の白人の黒さにも言及している。たとえば由緒ある裕福な家柄のテンブルの目はその黒さがしばしば強調されているし (67, 76, 147, 214, 224)、テンブルの居場所の情報をホレスやドレイク判事に売りつけたクラレンスの目の黒さにも語り手は一度言及している (265)。ホレスも、妻と義理の娘のいるキンストンの家をこっそり出ていく自らの姿をナーシサに “like a nigger” (108, 117) と揶揄されている。

テンブルとクラレンスの目の黒さには人種的な意味合いよりも不吉で邪悪な特徴が強くあらわれている一方、ナーシサの発言はあきらかにホレスを黒人と同一視するものである。デュヴァルは、ホレスと黒いポパイが表裏一体の存在であることを指摘したうえで、リーがリンチに遭って焼死した後、暴徒がリーを弁護したホレスをも襲おうとする場面を、ホレスが “like a nigger” から “symbolically black” になる過程として考察している (Duvall 40-47)。『サンクチュアリ』における白人の登場人物の黒さが身体的な黒さだけではなく、社会的地位やふるまいにも含まれることは本稿の議論でも取り上げてきたが、ここで前提となるのがジム・クロウに基づく白人と黒人の線引きである。この明確な線引きがあるからこそ、人々は社会規範（これは必ず

しもホレスの言う“the law, justice, civilization” [132] とは限らない) を守ろうとし、それを逸脱した者は罰せられる。本作品で生じる数々の暴力的で陰惨な事件は、ジム・クロウの法制度の歪みとこれが差別・排除の正当化に用いられた結末であると言える。

まず本章では、無法者のプア・ホワイトが階級（黒人に近い）よりも人種（白人）のアイデンティティを重視する背景を、プア・ホワイト全体と上流階級の白人エリート層との関係性から考察する。そして、ジム・クロウを最大限に活用したのが実はプア・ホワイトではなく、白人エリート層であることを確認する。『サンクチュアリ』はジム・クロウを操る上流階級の優位性が最終的に際立つ物語なのである。

最初に、ポパイ、リー、ルービーが自身と黒人を差別化した背景について検討してみたい。南北戦争の敗戦と連邦政府や軍の介入を許した再建期を経た南部の歴史を詳細に考察したヴァン・C・ウッドワードは、競争的な労働市場においてプア・ホワイトが黒人に対して差別意識と敵対心を抱き、ジム・クロウを支持するようになった背景を次のように説明する。

As the Negroes invaded the new mining and industrial towns of the uplands in greater numbers, and the hill-country whites were driven into more frequent and close association with them, and as the two races were brought into rivalry for subsistence wages in the cotton fields, mines, and wharves, the lower-class white man's demand for Jim Crow laws became more insistent. It took a lot of ritual and Jim Crow to bolster the creed of white supremacy in the bosom of a white man working for a black man's wages. (Woodward, *Origins* 211)

ウッドワードは、南北戦争後、プア・ホワイトがかつて奴隷であった黒人労働者と仕事のポストを巡って争うようになったことがジム・クロウの発展に大きく寄与したと指摘する。本作品でクローズアップされる酒類密造・密輸

の仕事には白人と黒人の両方が参入できたため、特に人種間の軋轢が生じやすかったと考えられる⁴⁾。本作品の密造酒グループには白人しかいないが、それは黒人を排除しようとするジム・クロウの論理が働いていたからだろう。語り手や他の登場人物から黒い外見とふるまいを指摘されながらも、ポパイ、リー、ルービーが自身を黒人と同一視することがないのは、こうした労働事情も関係しているように思われる。

とはいえ、プア・ホワイトは白人の優位性を主張するのみで、その根拠となる法制度の成立に関与しているとは考えにくい。ここで上流階級の白人エリート層の存在が重要になってくる。

優生学の影響でプア・ホワイトは白人エリート層にとって脅威だったため、南北戦争で敗戦すると、彼らは解放直後の黒人と手を組んでプア・ホワイトに対抗した。彼らはプア・ホワイトが“unfit,” “feebleminded,” “degenerate,” “racially inferior”であると判断し、黒人と同様の“racial primitiveness”を有する存在と見なしていたのである (Taylor 59)。ところが、彼らは次第にプア・ホワイトに協調するようになる。ウィリアム・J・ウィルソンは、黒人をコントロールする法制度を最初に作ったのが、黒人と同じ労働条件で働く白人労働者ではなく、南部の旧農園主とそのビジネス仲間および政治的同盟者であることを指摘し、その背景には、旧農園主に対するプア・ホワイトの反感を招かないようにし、黒人とプア・ホワイトの経済的・政治的協力や階級的忠誠を阻止する狙いがあったと述べている (Wilson 435, 437)。ジム・クロウの正当化は、白人エリート層による下層階級 (黒人・白人を問わない) の社会的統制、労働不安の鎮圧、経済的搾取から目をそらさせることを可能にした。白人エリート層は、人種差別的なテロリズム、リンチ、拷問、殺人、

4) デュヴァルはミシシッピ州オクスフォードで密造酒の販売を行っていた黒人のネルス・パットンの実例を挙げて、この職種における人種の壁が低かったことを指摘している (Duvall 44, 173)。デュヴァルはリーが黒人と同一視されていく過程を考察するが、本稿では、こうした両者の社会的地位の類似性とは裏腹に、プア・ホワイトがジム・クロウを支持し、黒人と連帯するのを拒否する傾向にあることを議論の対象としている。

虐殺による支配の恩恵を受け、自分たちの目的のためにそれらを利用したのである（Woodward, Preface ix）。

上流階級のテンブルの偽証によって無法者のリーが有罪になり、町の暴徒によってリンチを受けて焼死する結末は、“justice doesn’t work across class boundaries”（Palmer 128）の証左である。裁判の場面では上流階級の優位性が際立ち、最後に理不尽な死や別れを迎えるのはポパイ、リー、ルービーといった無法者のブア・ホワイトなのだ。本作品における町のその他の白人はその火付け役として動員されただけのように見える。

『サンクチュアリ』に登場する白人エリート層の代表格はミシシッピ州の州都ジャクソンに住むテンブルの父親のドレイク判事であろう。彼は州知事と食事ができるほどの地元の名士であると同時に判事として法律を形成・支配する立場にある。オールド・フレンチマン屋敷で窮地に陥ったテンブルが必死に祈ろうとしたとき、天なる父へ呼びかける言葉が一つも思いつかなかったのも、権威の象徴として“My father’s a judge; my father’s a judge”（51）と繰り返す場面は、彼女が父親の威光を笠に来ていることを示すだけでなく、上流階級に有利な法制度や判決がいかなる難題をも解決してくれるというこの階級の司法制度に対する信頼をあらわしている。弁護士のアレスが上院議員のクラレンスから“a lawyer that’s going to be as big a man as his pa some day, and a judge too”（266）と勘違いされて“Judge”（173, 186, 202, 203, 207, 208）と繰り返し呼ばれるのは皮肉であろう。無法地帯のオールド・フレンチマン屋敷では法律はなんの役にも立たないが、ジェファソンの法廷で法律は大きな威力を発揮する。

ドレイク判事が本作品で実際に登場するのは物語の終盤に入ってからだ。彼はテンブルの4人の男兄弟とともにリーの裁判の途中にあらわれて、郡庁舎の法廷の後方にひかえていたが、地方検事が聴衆にテンブルの惨事を説明し、テンブルがリーを犯人だと偽証すると、法廷の前方に堂々とした歩き方でやってきて、有無を言わせない強引な態度で娘を法廷から連れ去る。語り手はドレイク判事の外見を“neat white hair and a clipped moustache like a

bar of hammered silver against his dark skin” (288) と説明するが、彼の整った白髪と刈り込んだ銀白色の口ひげと囚人リーの黒い髪と黒い無精ひげは、両者がともに浅黒い肌をしているだけに対比が際立つ。ドレイク一家が法廷を後にしてからまもなく、白さ（白色人種）よりも黒さ（外見、ふるまい、社会的地位）が強調されたリーは町の暴徒のリンチを受けて、地方検事が裁判の冒頭で暗示したように“a bonfire of gasoline” (284) で焚刑に処せられるのである。

テンプルはオールド・フレンチマン屋敷やメンフィスで不安と恐怖の日々を過ごすか、最後は自ら属する上流階級の世界に戻っていく。ホレスも暴徒のリンチを逃れ、妻の待つ家に帰宅する。物語で最終的に悲劇に見舞われるのは、ポパイ、リー、ルービーなのである。上流階級の白人はホレスが拠り所とする“the law, justice, civilization” (132) とは異なる論理や感情論を用いて、プア・ホワイトと黒人を分断し、白人暴徒を扇動することで、ジム・クロウ社会を自らに有利になるように維持する。

V ジム・クロウ社会からの逃避——パリとヨーロッパ

最終的に社会的地位のあるテンプルとホレスはジャクソンとキンストンの家に戻り、無法者のポパイとリーは絞首刑と焚刑になり、ミシシッピ州のジム・クロウと階級社会はより強固なものとなる。リーの裁判を見守っていたルービーと赤ん坊の行方については語られていないが、もともとナーシサや教会婦人たちの非難にさらされていたので、ジェファソンに留まることはできないだろう。語り手はルービーの赤ん坊を“like the children which beggars on Paris streets carry” (116) と説明するが、彼らが別の町で“beggars” のように食い繋いでいこうとするのは容易に想像できる。

赤ん坊の説明で興味深いのがパリのたとえである。ポークが指摘する通り、『サンクチュアリ』の執筆過程は、フォークナーの1925年後半のパリ滞在に遡ることができるだろう (Polk 17)。物語の最後でテンプルとドレイク判事がパリのリュクサンブール公園にいる場面は、フォークナーが彼の母親に宛

てた1925年9月6日付の手紙の内容を想起することはよく知られている (Blotner 17-18)。リーが第一次世界大戦時に派遣されたのはフランスだし、パリではないがフランスへの言及は他にいくつもある。オールド・フレンチマン屋敷やフレンチマンズ・ベンドがフランス由来であることから、本作品におけるフランスへの言及の多さは、フォークナーのフランス滞在やフランスへの高い関心と無関係ではないだろう⁵⁾。

法廷でリーを弁護することになったホレスがヨーロッパ行きをほのめかす場面も興味深い。彼は次のように独り言をつぶやく。“When this is over, I think I’ll go to Europe. . . . I need a change. Either I, or Mississippi, one.” (134) 物語の終盤でも彼は同じように弱音を吐く。“I’ll finish this business and then I’ll go to Europe. I am sick. I am too old for this. I was born too old for it, and so I am sick to death for quiet.” (260-61) 正義感からリーの弁護を買って出たホレスだが、リーの弁護に限界を感じたり、ジェファソンの閉塞感漂う白人コミュニティに嫌気が差したりすると、ヨーロッパに逃避しようとする。これは彼がイギリスのオクスフォード大学で教育を受けたことも影響しているだろうが、彼はテンプルとドレイク判事のように実際に渡欧することはない。しかし、その気になれば渡欧できる立場にあるのは共通している。

本作品ではパリやヨーロッパが故郷のしがらみからの解放や息抜きを意味するが、渡欧を夢想・実現できるのは経済的に豊かな上流階級の白人である。貧困層のルービーは、現在の苦境から逃れたくてもこれまでのようにアメリカ社会の底辺で泥臭く生きていくしかない。本作品は、南部の支配層が人種・階級イデオロギーを形成し、さまざまな選択肢を有していること、そしてこうしたイデオロギーや社会秩序に翻弄されながら生きることを余儀なくされた無法者のブア・ホワイトの悲哀を描いている。

(筆者は関西学院大学商学部准教授)

5) 本作品におけるフランスへの言及、本作品とフォークナーのフランス滞在の関係性、彼のフランスへの想いについては、Polk, “Luxembourg Gardens” に詳しい。ポークは特に、テンプルとリュクサンブール公園の女王の大理石像の類似性を見出し、物語がこの公園を舞台に幕を閉じる妥当性を主張している。

引用文献

- Barker, Deborah. "Moonshine and Magnolias: *The Story of Temple Drake and The Birth of a Nation*." *Faulkner Journal*, vol. 22, no. 1/2, 2006, pp. 140-75.
- Blotner, Joseph, editor. *Selected Letters of William Faulkner*. Random House, 1977.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. Yale UP, 1963.
- Duvall, John N. *Race and White Identity in Southern Fiction: From Faulkner to Morrison*. Palgrave MacMillan, 2008.
- Faulkner, William. *Sanctuary*. Vintage, 1993.
- Fiedler, Leslie. "Pop Goes the Faulkner: In Quest of *Sanctuary*." *Faulkner and Popular Culture: Faulkner and Yoknapatawpha, 1988*, edited by Doreen Fowler and Ann J. Abadie, UP of Mississippi, 1990, pp. 75-92.
- Fowler, Doreen. "Faulkner's Return to the Freudian Father: *Sanctuary* Reconsidered." *Modern Fiction Studies*, vol. 50, no. 2, 2004, pp. 411-34.
- Guttman, Sondra. "Who's Afraid of the Corncob Man?: Masculinity, Race, and Labor in the Preface to *Sanctuary*." *Faulkner Journal*, vol. 15, no. 1/2, 1999/2000, pp. 15-34.
- Isenberg, Nancy. *White Trash: The 400-Year Untold History of Class in America*. Viking, 2016.
- Jacobson, Matthew Frye. *Whiteness of a Different Color: European Immigrants and the Alchemy of Race*. Harvard UP, 1998.
- Nunn, Erich. "'Dont Play No Blues': Race, Music, and Mourning in Faulkner's *Sanctuary*." *Faulkner Journal*, vol. 24, no. 2, 2009, pp. 77-98.
- Palmer, Louis. "Bourgeois Blues: Class, Whiteness, and Southern Gothic in Early Faulkner and Caldwell." *Faulkner Journal*, vol. 22, no. 1/2, 2006/2007, pp. 120-39.
- Polk, Noel. Editors' Note. *Sanctuary*, by William Faulkner, Vintage, 1993, pp. 319-26.
- . "Faulkner in the Luxembourg Gardens." *Études Faulknériennes I: Sanctuary*, edited by Michel Gresset, Presses Universitaires de Rennes, 1996, pp. 27-34.
- . "The Space between *Sanctuary*." *Intertextuality in Faulkner*, edited by Michel Gresset and Noel Polk, U of Mississippi P, 1985, p. 16-35.
- Taylor, Kirstine. "Untimely Subjects: White Trash and the Making of Racial Innocence in the Postwar South." *American Quarterly*, vol. 67, no. 1, 2015, pp. 55-79.
- Wilson, William J. "Class Conflict and Jim Crow Segregation in the Postbellum South." *Pacific Sociological Review*, vol. 19, no. 4, 1976, pp. 431-46.
- Woodward, C. Vann. *Origins of the New South, 1877-1913*. Louisiana State UP, 1951.
- . Preface. *Jumpin' Jim Crow: Southern Politics from Civil War to Civil Rights*, edited by Jane Dailey, Glenda Elizabeth Gilmore, and Bryant Simon, Princeton UP, 2000, pp. ix-xi.